

〈資料紹介〉 田中英光とアドルム

——「催眠剤のこと」「アドルム禍」——

田 中 励 儀

二〇一三年に生誕百年を迎え、没後六十五年を閲する二〇一四年、『田中英光事典』（三弥井書店）が刊行される。これまで田中英光の書誌は、『田中英光全集』第十一卷（昭和40・12・20、芳賀書店）に収められた、林清司編「田中英光年譜」が唯一のものであったが、「年譜」と「著作目録」を融合した形式が採られたために、作品名・掲載誌紙名・発行年月のみの表記に留まっていた。今回、『田中英光事典』の編者のひとりとして名を列ねた私は、英光の文章の収集に努め、「著作目録」の編纂に当たっては、一覽性を損なわないように注意しつつ、掲載誌紙の巻号数・発行年月日・掲載頁・発行所名・挿絵の有無など、より詳しい情報を表記した。『全集』未収録作品は、小説・随筆・座談会・アンケート回答ほか、併せて二〇〇件を超す。

「ぼくは戦中派の新人だからね。文壇的地位を築くには舞台が少

なかつたし、さて戦後になってみると出戻り娘のように毛嫌いされる」という愚痴を口癖にしていたと伝えられる（北村鱒夫『小説田中英光』昭和40・2・25、三一書房）英光だが、実際には戦時下朝鮮における植民地政策の中で、また、戦後日本におけるジャーナリズムの中で、短期間に膨大な数の文章を発表していたのである。

今日、英光は太宰治の墓前で刺刀自殺を遂げた作家として記憶されていようが、その破滅に至る過程で、薬物中毒・精神病院入院・愛人刺傷事件を引き起こし、世間の矚目を買っていた。太宰治の自死が確認された昭和二十三年六月十九日以降、その衝撃からアドルムやカルモチンの服用量が増え、中毒症状が激しくなった。翌二十四年四月から五月にかけて治療のために戸塚精神病院に入院。退院後も薬物を断ち切れず、五月二十日、愛人山崎敬子と口論中、過つて下腹部を庖丁で刺し、四谷署に逮捕される。三十一日、精神鑑

定のため松沢病院に入院。意識混濁下の行為として不起訴となり、七月下旬、退院する。

その体験を基にして著された小説は数多く、「脱党し、家に拮抗し、酒アドルムに苦しみ、遂には愛人を傷害して世上に問題を投げた著者の赤裸々な魂の慟哭」とセンチシヨナルな宣伝文が刷り込まれた作品集『愛と憎しみの傷に』（昭和24・10・5、月曜書房）に収められた標題作および「野狐」「離魂」が代表作とされる。しかし、これまで随筆の形で薬物中毒や精神病院入院の体験を語った文章は知られていなかった。ここに、二編を紹介したい。

催眠剤のこと

田中英光

太宰治さんは、五、六才の時、神経衰弱で眠られなかつたというが、私も、幼年時代から、不眠の記憶に、たびたび悩まされた思い出がある。そして幼児には、夜に対する特別の恐怖がある為、眠られぬ夜々が、むやみに怖く、厭らしかつた。

しかし学生時代にボートを始めると、私の不眠は一掃された。けれども、それから秘密の政治運動を始めると、又、恐ろしくて、よく眠られなくなつた。この頃から、私は時々ヂアールやアダリンのような催眠剤を使いはじめた。けれども、それは用量に注意してい

たので、たしか、一度に二錠以上は飲んだことがない。

その中、私は、政治から脱落し、友人たちと同人雑誌を始め、酒の味を覚えた。今では酒はいくら飲んでも酔わず、たまに酔つた時には、真夜中にフイと眼がさめ、朝方までアジケない思いをするところがあるが、その頃の私は、酒を飲むとよく眠れた。

続いて、卒業、就職、出征と続き、私は、戦場では、本当にグツスリ眠つた。死んでもいいから、眠りたい思いだつたのである。

帰還から、米機爆撃の始めから終りまで、私は、軍需会社の係長という位置を乱用して大いに酒をのんだ。而し、真夜中、サイレンの音に眼ざめると、さめたあとの恐怖と、爆撃の恐怖が、ダブルオカスになり、私は、ブルブル震える恐ろしさ。近くで催眠剤をさがしてみたが、例のプロムワレリル尿素剤というのが、入手できる唯一のもので、それも大男の私は、うんざりするほど大量、飲まねば眠られなかつた。

そんな時には、ビールや、酒のお菜に、少し宛、尿素剤をまぜると、本当に、心底から酔えることを知つた。その頃私は一億玉碎の声に脅えていたから、できれば眠るように死にたいと思うのが理想だつた。

その中に、敗戦。私は会社を止め、文学に専念する積りだつたが、半年後に、青年時代の政治運動に、再び、首を突込むようになり、

ピラ刷りや、新聞配達もやつたので、この時はよく眠れた。

廻が、又、文学の世界に戻つてみると、とたんに眠れない。而し、まだ町には、新薬がないので、私は当分、尿素剤一本槍だった。それも始め十錠ほどだったのが、五十錠でもダメという風になつてくると、私は、朝から覚醒後のボンヤリした気持で、小説が書けない。それで、私は覚醒剤を飲んで、徹夜をし、そのあと、すぐ催眠剤を飲むというような日茶苦茶をした。

その為、私は、覚醒剤の時は、頭が破裂しそうに痛んで、油汗が流れ、催眠剤の時には嘔吐を催おし、下痢をするといった。惨憺たる身体になつてしまつた。

その後、私は東京に出て「アドルム錠」というのを知つた。他に、も、二、三の新薬を試みてみたが、どれも「アドルム」ほど、自然に眠れ、覚醒後、ハッキリできるものはない。

それ以来、私は「アドルム」の信者になつてゐるが、困るのは、この薬時々、品切れになつたり、闇値で売られてゐることである。

こうして、長々と御返事を書いたのも「アドルム」をごつそり沢山送つて頂きたいという、私の乞食根性からである。それだけ、又私が「アドルム」で助かつてゐることも、お世辞ではない事実なのである。

〔月刊シオノギ〕第三卷第一〇号、11頁、昭和23・10・5、月

田中英光とアドルム

刊シオノギ社)

大阪道修町の塩野義製薬が発行する雑誌の需めに応えて記された随筆。英光自身が薬物歴を振り返つた点で貴重である。この随筆が発表された昭和二十三年十月は、太宰治の没後、アドルムやカルモチンの服用量が増えた時期に当たる。肉体を酷使するポート・従軍・戦後の政治活動では熟睡できたが、文学活動では薬物依存が高まり、「覚醒剤の時は、頭が破裂しそうに痛んで、油汗が流れ、催眠剤の時には嘔吐を催おし、下痢をするといった。惨憺たる身体になつてしまつた」と記す姿が痛ましい。当時、アドルム錠は市販されており、英光にとっては、「自然に眠れ、覚醒後、ハッキリできる」欠かせないクスリだった。月刊シオノギ社編集部への依頼に応えたのも、アドルム錠を常備しておきたいという下心があつたからだという。

「薬剤師協会便り」のコーナーが設けられていたり、投稿欄「LETTER」に薬剤師の文章が掲載されていることなどから、「月刊シオノギ」は薬剤師を主な読者対象としていたと考えられる。投稿者のひとりには、アドルム錠を「や、こしい構造をしている催眠薬であると思いつ、売つていたのである。要は——目覚めた後口がよいから……」と、英光の感覚を裏付けている。製薬会社の広報誌に

掲載されるほど一般に普及していたアドルム錠だが、同時に「ダンサーが自殺行為に使用した」「劇薬」として、オウロバンカルシウムとの混同が投稿欄に伝えられているように、副作用が問題視され始めていた。塩野義製薬からアドルム錠が送られてきたかどうか定かではないが、服用量が増えた英光は、傷害事件を引き起こし松沢病院に入院する。

アドルム禍

田中英光

多くの入れられていた松沢病院でも、同じ病棟の中に三人、他にも百錠も飲んで事件を起したとかいう同病患者がそれぞれいた。なおこれは特殊な方法で、あの鉄〇の厳しい病院の中でも、いまアドルムを飲みつ、あり、ひよつとすると、松沢の中で、アドルム中毒になるのではないかと思われる男がある。それほどアドルムは魅力があるというのは、ただアドルムが催眠剤としてばかりでなく、それが中毒となつてくると、むしろ昂奮剤としての作用を呈してくるところにある。

もち論、それは、いきなり普通人が二錠か、三錠ないし十錠、二十錠のんだところで、ただ眠くなるとか、あるいは二日三晩、コンコンと眠り続けるばかりで、快感もなにもないが、それが半年なり

一年なり、每晚十錠の〇〇を続けていた上に、二十錠か、三十錠をおおると、コンゼンとした昂奮、メイテイ状態を起すようになる。そのメイテイ状態に、アドルム特有の不純物からくる一種異様な昂奮が伴うわけで、中毒患者は、その異様な昂奮状態を忘れられなくなる。

その昂奮の前後に、ひどく色情的になるという人もいるが、多くの経験では、それはそれほど、ひどくないようだ。それはむしろその時の条件と〇〇によるといつてよい。ところで、そんなにエロテイツシユになつても、それは、モルヒネイズムと同様、オルガムスに達しないのが例のようである。

ただ一般に、狂暴になるのは事実である。アドルムイズムの特徴は、くちびるが乾き冷たくなり、瞳がつまり上がり座つて顔が真蒼になる。そして世の中に、怖いものがなくなる。その感じが、デフレシヨニズムの患者たちには、なんともいわれぬ。それで、いまの世中に抑圧を感じ、現実を忘れたいイズムの患者たちが常用するのである。

ほくも、そんな意味でアドルムを常用し始めた。そしてやがて一日、十錠を欠かせぬ患者の一人となつた。アドルムを止めると、いわゆる禁断症状が興り、幻視聴まで興るのである。

幻聴では、子供の泣き声をいちばんひどく聞いた。松沢に入つて

いた克蘭ケの一人でバラライズの男がおり、これがぼくなどより将棋の名人のくせに、対局中しばしば、

「お前が悪いんだ。お前が悪いんだ。」

という天来の声が、どこからともなく、聞えてきて、しかも、駒の手を誤まらなかつた男がいるが、ぼくの幻聴もこんな種類のもので、どこからともなく、子供の泣き声がぼくを責め、しかもぼくの仕事の邪魔にはならなかつた例である。

幻聴はこんな種類であるが、幻視は、色覚的なものが、いちばん多かつた。留置場のかべが武者絵や、大和絵のようにみえたり、ひどい時では、そこに実在しない小動物がみえたことがある。

もつとも、それはいちばん中毒症状のひどい時で、薬が切れてくると、耳鳴りがする程度で——といつて薬が切れてくると、食欲不振、赤面恐怖、仕事ざらい等のひどいことになり、それこそぞろ棒をしてまで薬が手に入れたくなる。モルヒネイズムと同様の特徴を現わすことになる。

ぼくはアドルム中毒になり、一度病院に入り、一時軽快退院したが、外部の事情でまた大量に飲み、あのような事件を起してしまつた。しかし、ぼくが女のひとの局部を刺したとか、ある新聞に出たそうだが、嘘八百も甚だしいことで、アドルムは一種、モルヒネイズムの如く、非色情的になるのでそんなバカなことはない。

こうしたイスマスの連中は、松沢では一括して、性格異常と呼んでおり、ただ座敷牢のようなところに入れ、外部と遮断しておくだけで、別に持続睡眠や電気ショックのような治療はしない。ぼくにはそれが反つて合理的のよう考えられる。

約五十日間、アドルムと強制的に縁を切られてきたわけなので、もう二度と、あのにが白いタブレットを口にすることもあるまい。いまは後事をあまり考えず、ただ作品を書いて行きたい。そして好い作品を書けば色々なトラブルも自然解決されるだろうと虫のよいことを考えている。

〔フレッシュ〕第四卷第八号、昭和24・8・5、21頁、読物フレッシュ社)

掲載誌「フレッシュ」は、佐賀県唐津市の読物フレッシュ社が発行した、いわゆるカストリ雑誌。当時、戦災を免れた地方発の雑誌は多かつた。三大特集「産制なければ惨め」「話題の裏をのぞく」「随筆四人集」が生まれ、英光の「アドルム禍」は、「随筆四人集」のひとつとして、別当薫「野球の敵」、室生犀星「美女たち」、永井隆「如己堂随筆」と並んで掲載された。充実した執筆者を誇る、上質なカストリ雑誌といえよう。

前の「催眠剤のこと」でアドルム錠の後口の良さに頼つた英光だ

が、この「アドルム禍」では、妄想が頻発する中毒症状を詳細に記している。林清司編「田中英光年譜」では「七月上旬、高村昭（小山書店編集部）らの尽力で早期退院する」と記されているが、五月三十一日の松沢病院入院から「約五十日間、アドルムと強制的に縁を切らされてきた」という英光の記述を信じれば、退院は七月下旬となり、「アドルム禍」は退院直後の心情を綴った貴重な文章と位置づけられる。

アドルム錠を服用すると、「くちびるが乾き冷たくなり、瞳がつまり上がり座つて顔が真蒼になる。そして世の中に、怖いものがなくなる」。止めると禁断症状が起こり、子供の泣き声がはくを責め、壁が武者絵や大和絵のように見えたり、ひどい時では、そこに実在しない小動物が見えるなど、幻聴・幻視に悩まされたという。子供の泣き声は、妻との不和から愛人とともに暮らしつつも、息子や娘に対して後ろめたさを感じている英光だからこそ聴いた幻聴だと思われる。子煩悩で誠実な英光の一面が垣間見られよう。「もう二度と、あのにが白いタバレットを口にすることもあるまい。（中略）ただ作品を書いて行きたい。そして好い作品を書けば色々なトラブルも自然解決されるだろう」と結んだ英光の決意は、嘘ではなかったはずである。しかし、薬物の誘惑は強く、常用を断ち切ることはできなかった。三ヶ月後の十一月三日、英光は自死した。

「野狐」「離魂」などデカダン時代の苦悩を表白した愛欲小説の佳作も多いが、今回確認できた『全集』未収録作品の中には、薬物中毒の中で書かれたと推測される、整った筋立ての無い小説が見出せる。一例をあげよう。「月刊静岡」第三卷第十一号（昭和23・12・1、26頁〜30頁、静岡民友社）を初出とする「妖艶天光教」である。

——古橋警部は、新興宗教天光教の世話役の弁舌にのせられて、現在、失業中。教祖「おさずけもと大神」の元に出向き託宣を受ける。教祖は何と、旧知の安兵衛酒場の小母さんだった。ムンムンする香を嗅がされ、「えにしむすびの水」を飲まれた古橋は欲情をそそられるが、いつしか昏睡していた。そこに現れたのは、天玉泉三十二歳と天霊児十八歳のふたりの巫女。天玉泉が甘い液体を口移して古橋の喉へ流し込み、天霊児が怪しげな唄を耳に吹き込む。液体は媚薬と催眠剤であつたらしく、身体を自由を失つた古橋は、「これは天国か？ 地獄か？」と心惑う。やがて目覚めた古橋はふたりの巫女に身体を寄せられ、「肉欲の乱舞」に陥る。ジャズめいた音楽が流れ、金屏風銀屏風が開かれて、またひとりりの女が現れて踊り、身につけた白い布がはがされていく。あたりは紫色の世界となった。「さーずけ、さーずけ、あ、あはら、あはら、あはら大神」。部屋中一杯に紙片が舞う。どうやら降ってくるのは贖札らしい。古橋は、こいつは「よい捕り物」だと心に決めていた。——

催眠剤や覚醒剤を服用した時に見た性的幻想を、戦後の一時期に流行した新興宗教に絡めて文字に表した（作品）とみられる。新興宗教に絡め取られる主人公を警部と設定したところに諷刺性を見出せないわけではないが、それも贋札造りを逮捕しようと決意する結末では、不発に終わっている。

英光の没後、それまで持ち込み原稿の掲載を渋っていた雑誌も含め、未発表作品が一齐に掲載された。「聖ヤクザ（絶筆）」（新潮）、「今様一代女（絶筆）」（小説界）、「君あしたに去りぬ（遺作）」（群像）、「恋ゆえに（遺作）」（にっぽん）、「愛流（遺稿）」（小説と読物）、「春の果実（絶筆）」（夫婦生活）、「川歌（遺稿）」（ホープ）、「蜻の運命（絶筆）」（小説読物街）、「子供たちに（遺稿）」（新小説）、「共産党離党の弁（遺稿）」（世界春秋）、「生きている怪談（絶筆）」（大衆小説界）、「地球と火星との戦ひ（巨底秘稿）」（大衆読物）。「絶筆」「遺稿」など角書が付された作品だけでも十指に余る。販売部数を競うジャーナリズムの打算も窺われ淋しい気持ちも起るが、「遺稿」の中には、鑑賞に価する『全集』未収録作品も散見されるので、機会があれば紹介したい。

また、センセーショナルな話題に乗じて、英光を主人公とした実名小説も発表された。郡山千冬「愛と憎しみの作家田中英光」（『で

かめろん』第四巻第一号、昭和25・1・1、竹内書房）、加地春彦「愛と死の戯れ―敗れた人生選手田中英光の場合」（『大衆読物』第三巻第一号、昭和25・1・1、創世社）である。いずれも、死の報道がマスコミを賑わせたわずか二ヶ月後のことである。郡山作品は、以前、「田中英光と雑誌『でかめろん』」（『無頼の文学』第二二号、平成10・4・1、無頼文学会）で紹介したので、今回は加地作品について述べたい。

郡山千冬が、妻と愛人の間で懊悩し、デカダンな生活を改められない英光を、「野原に立つた子守娘が、夕焼雲を見て泣き出すような」「原始感情」を愛する男、「他人を見下すことの生れつき出来ない人間」と規定し、「僕はどんな人間だつて好きなんだ。」文学よ栄えあれ。」という言葉を残してあの世に旅立ったと、愛情の籠もった眼で描いたのに対し、加地春彦は、薬物中毒と傷害事件を中心に、英光の晩年を興味本位に描いた傾向が強い。

——町で喧嘩の仲裁に入ってくれたことがきっかけで女と同棲するようになった英光は、社交喫茶で働く女に嫉妬し、薬とアルコールを飲んでは暴れた。「酔わぬ時の田中英光は、文字通り虫けら一つ殺すことの出来ない男」だったが、女に閉め出されたことで激高し、鍵を壊して家の中に躍り込み、台所にあった刃物を振り回す。

「刃物はグサリと、女の下腹部を突いていた。女は唸り、倒れ、血

を流した」。留置場から精神病院へ。退院後、女の看護をしながらしばらく暮らしたが、事件の後、かえって作品の注文は多くなつた。すると、どうしても睡眠剤と覚醒剤へ手が延びるのだつた。運命の日、英光は大宰治の墓前で睡眠剤と焼酎を飲み、剃刀を持ち出す。

「大宰治全集は美しく白く、彼の膝の前にある。剃刀の刃は左手首に当てられ、強くえぐられた。血が迸はなりしつた」。――

薬物の描写が多いのも加地作品の特徴である。「覚醒剤の量が増すと、どうしても睡眠剤を飲まなければ眠れなくなる。酒と睡眠剤が重なると、彼は妄想の世界のなかに飛び込んでしまふ。」との加地の描写は、英光「催眠剤のこと」の「私は覚醒剤を飲んで、徹夜をし、そのあと、すぐ催眠剤を飲むというような目茶苦茶をした。」の一文と対応しているし、睡眠剤を飲んだ時の「あたりが真赤に見えたり、真黒に塗りつぶされているように見えたりする。頭は痛む。わけの分らない、狂つたような音楽が何処から彼の耳を打つて来る。」という加地の描写は、英光「妖艶天光教」の「ジャズめいて聞こえる」音楽に満ちた「紫色の世界」と対応する。あるいは、当時は薬局で買えた薬物を、加地自身も服用していた可能性もあろう。

なお、この加地春彦「愛と死の戯れ―敗れた人生選手田中英光の場合」は、「大衆読物」誌に「文壇モデル小説」として、郡山千冬

「悲恋に悩む熱情の作家―菊田一夫の場合」と並んで掲載された。グラビア頁には、田中・菊田の写真が三枚ずつ掲載されている。郡山は同月に、田中英光（「でかめろん」）・菊田一夫（「大衆読物」）、ふたりの実名小説を発表していたことになる。「恩師大宰治の墓前の草原に坐り自らその命を絶つた田中英光。戦後、その特異な作風に文壇を驚ろかせた彼も、その私生活ではアドルムと焼酎に酔いしれて、新宿の夜を彷徨する自虐の作家であつた。」との惹句が示すように、加地作品には俗情を煽る創作意図が垣間見られる。英光の自殺が大きく世間の関心を集めていたことの証左であらう。

世間の通俗な興味が大きければ大きいほど、英光の実像は歪められがちになる。その意味でも、ポト時代・戦争時代・党活動時代を振り返りつつ、今現在の文学活動の中でアドルム錠への期待を記した「催眠剤のこと」や、傷害事件を引き起こし松沢病院で治療を受けた後、自ら中毒症状を書き記すことで薬物との訣別を誓った「アドルム禍」は、英光の誠実さと文学への希望を現す資料として価値がある。

〔付記〕「アドルム禍」の〇〇は、印刷が不鮮明のため判読が不明な文字を示す。同じ理由から、冒頭の二段落を省略した。また、英光の文章中、今日では使うべきではない表現が用いられている箇所があるが、時代性を考慮してそのまま表記した。